

コロナ予防へ弘大生が自主制作

自動消毒ロボ 学部内で活躍



自主制作した自動消毒ロボを試す、弘大ロボティクス研究会の佐藤さん

弘前大学の学生団体「弘前大学ロボティクス研究会」が、手をかざすと消毒液が出る自動消毒ロボットを制作、同大理工学部で使用されている。コロナ禍によりロボットコンテストや学祭など活動の場が失われる中、店で見掛けた自動消毒機をヒントに制作したもので、メンバーの1人佐藤司さん＝理工学部3年＝は「自己満足のもので終わらず、実際に人の役に立っているのがうれしい」と喜ぶ。

(西尾瑛)

3研究会「役立ってうれしい」

自動消毒ロボの制作は、佐藤さんが訪れた和菓子屋で手作りの自動消毒機を見つけたことがきっかけだった。「これならできるかもしれない」。コロナ禍で活動も制限される中、部員3人で昨年11月に着手。週

1、2回程度集まり、今年1月中旬に完成した。その仕組みは、手をかざすと距離センサーが反応。サーボモーターで糸を引っ張り、糸と連結した消毒ポンプ上部の板が下がって消毒液が出るもの。サーボモーターは、ロボットの関節などにも使われる技術だという。「今回使った技術自体は難しいものではない」というが、限られた予算の中での制作。研究会で持っていたマイコンコンピュータ(マイコン)やケーブルを使い、ホームセンターで買った板とティッシュの空き箱なども使って完成させた。「使用したマイコンは3000円くらいのものであったが、今回作ったロボ

ぐらいであれば5000円ほどのマイコンでも大丈夫。予算は30000円くらいあれば作る事ができるので」という。

佐藤さんは自然エネルギー学科で学んでおり、ロボット作りは趣味。ロボティクス研究会へはゲームを作ってみようという興味から入部した。「何を作ろうか、想像を膨らませるのが面白い。でも実際作ってみると、だいたいうまくいかなくて、理想通り動くことがうれし」。今回の消毒ロボもそう」と笑顔だ。

自動消毒ロボは、佐藤さんが時折調整しながら、大学のコロナ感染予防の一助となっている。佐藤さんは「同じ学生が作ったものとして、特に理系学生の刺激になればありがたい」と話した。